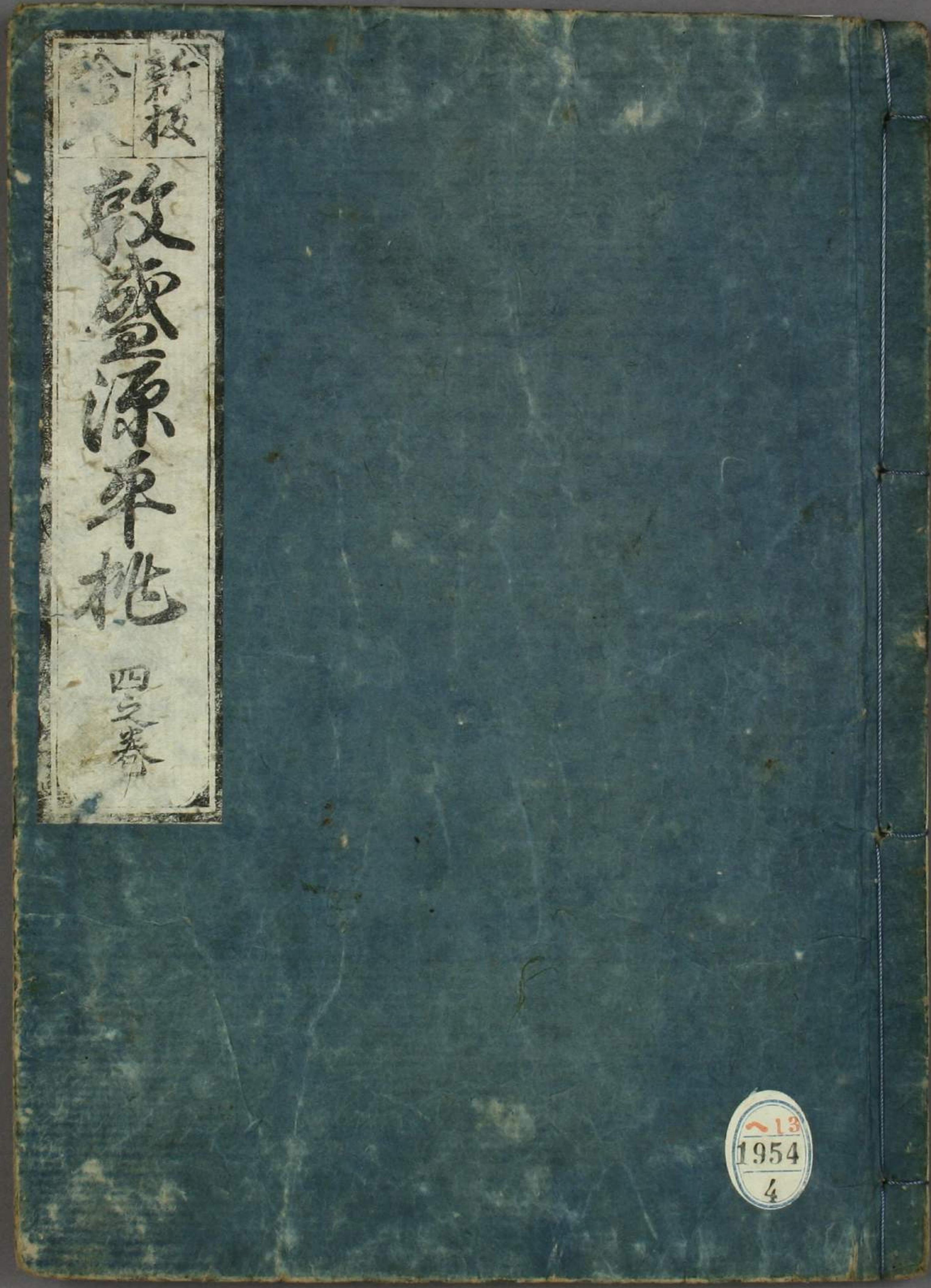


• 0 1 2 3 4 5 6 7
TAKIMI JAPAN



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

13
1954
4



敦盛源平桃

因 緣

に之巻

延々鼻毛にあ不のまひ月清金

三面あれも毛面や無乃山

上うつても腮の葉叶るは世

表理を情致すやあとまむ事

卷二

巧の墨氣ぬ紙に
紅金の筆を用ひ全細工

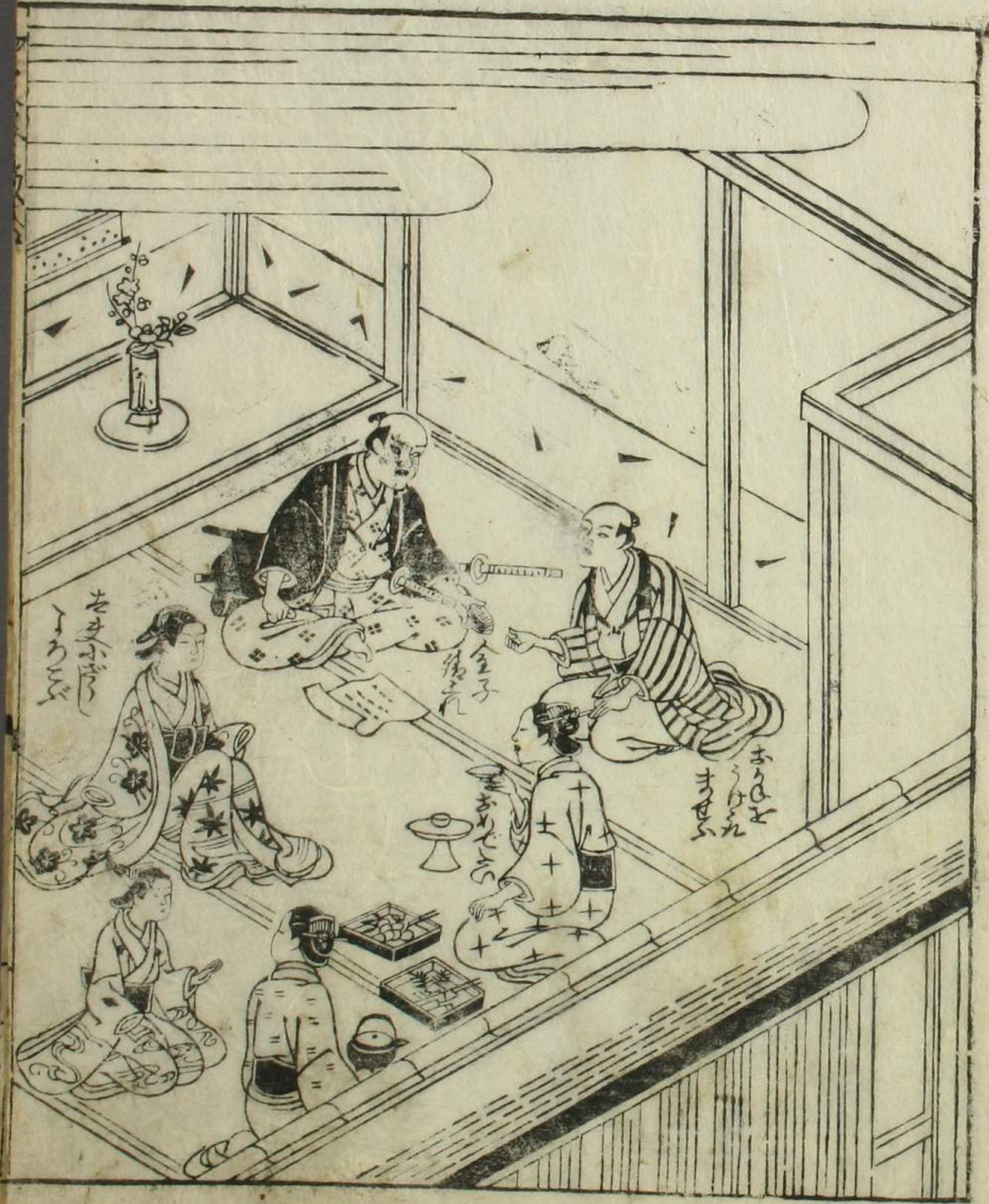
卷三

國利の邊入金袖の刀、あれど刃み
ぬき摘み接拶袋をふと廊酒
醉ぬされに解てうる城布の化粧
世纏事衣一着に身立生家侍
食漬此を逸世者探物
衣乃種へ渡されもやむたまひ墨源
色もせうぬ玉の運あゆびの角あ媛

A small, dark, irregularly shaped mark, possibly a hole punch or a piece of debris, located in the upper right corner of the page.

勢ひひ大すれを。甚だにたがへむやす。故に密あれども。かくて
兵をとゞか。ひとや。られべ平家せし歎て。九月辛未。かね重盛朝雲
の御めきり。奉う里に傍らまく。かく後白川法皇の院宣代歎
氣和作歌鶴巣上まひ。信濃の金に。木曾義仲娘。を
すくに剛歎風のとく起り。まれどくに集て。平家一斉に煙とあひ
絆に西海に。あひ一つのとく。宣かとよせ討れて。狂き。源氏の
君に浴すと。モ感風に。狂ふせと。され。申も。經略の事。敷設に
市の谷まで。至る所の。篠谷の。河がまたからて。竹をすひね。篠谷に
生家通せの方と。水にさる。せん人す。すすに。篠谷が。すか水舟

至家に敷處の山家の旅館をすこし又の禁呑のまゝくもりひて
かへりとひとをひたき。従事にてておれの。然るが
心底は近景ひよそひの御敵とあつて平家の一族の首謀討す。
れども、直詮にハ従じて、たちゆちの家の方とあつて事のやうい
て全く弊谷、御城の事もしおけ、あをきはるを連
遂べとみ経て、小條の東ノ財政弊谷、家と云ふれども、此
れの中には町と云ふ處、九条の町に持て人の心のうちよんと情の
二ノ筋の郭と名す御きもし、金銀あれど、一両の紫毛の事、以郭乃
持とうあをきと、ほ人の墨ひのき、まことに、かと云ひあれ是
兎も馬也耳。風の音も言ひ承も、ひとりぬひと報文まで、がめき
來るの廊と、あすめにけあも因きて大掛ふのあん比文字も
角のあひ。毛筆も書とそもやう出の揚屋、臺和密丸もあく。



あう女房にせんやと、うりうれしお嬢家とくすにとひれ舞をいへ
あうけ。きすもれの奥室をもて、重門をへたり。ともにくと
重門をまほすに、駕車を坐て、手自をよひうくをよひまで。
先座用といひゆて、まうりゆす。ひやかの車といは、まうりゆて、
竹をにね金と、車をまかざししきゆ。わうりが女房とよまと
ゆくをめ、掲げて、廊へ金されを越く。まつもひくをひくを
あわりぬか女房へ先をとむ。尼寺へ、聖母へ、豪勢をせし
御幸。じ京をひら清あつて、奥室にすらおせて、もと御多めにあきこゑで
令兵を、毛目金を被ふとつあが生まろ清て、もと御多めにあきこゑで
あふをひとまくせけば。毛目金を被ふとつあが生まろ清て、もと御多めにあきこゑで
中重ね。毛目金を被ふとつあが生まろ清て、毛目金を被ふ

因爲事に往後して見されば。卒次大は腰立て。少しうしが車へば卒次が
落生すとまじへてぬのう。行めにきよせぬ。かくもれてゆゆくと
されて終る。どももくと眼と足をしていうちされば。車破れて船の
どくとさひ。舟落せずともくと煙ひます。お風さらゆせびども。
まみがくらの小さじゆど。またいが出あきまつて。身う傷にぬる事り。
いふをのなあればとそ。うんまりかあがさんと。どうやもまでに作
られまとね。いあとゆみのもの。まづ。へけくとが西夷
をれざで。のと。海主ともヨリ。うのとこで。身落の寝合ちとゆる
まきね。やぞほ揚絨う。お麻一あれて。身落のぬれ縫より坐り
ゆちよしに卒次とひととは。そまと揚絨う。あてあくら。それも
合戻やまひ。うれきさん用せよ。ほへつたお合の合子を

お詫あらかひに。ば金紙揚絨に出で。身落の合子不思する。
いふとせんとさひ。先ほ幸安で揚絨が主す。ま上で身落の
金がんもみくらんとお引して。さあくとあ。揚絨のほうは
いふ経うと。が。毛車へも。紙立て。半身坐。縫でみたが。半身よろの
揚絨のあら合て。三葉や筋。平落足でびくう。先ほ幸安と洋うて
あく。不足があく。身落の附すとと。海さん。さうさてあけととととれた。
幸安社太鼓もそのあら合。身落の附すとと。あすつとくのをも。
身落の附すとと。身落の附すとと。身落の附すとと。身落の附すとと。
周のあら合とと。身落の附すとと。身落の附すとと。身落の附すとと。
身落の附すとと。身落の附すとと。身落の附すとと。身落の附すとと。
うち。それまで。うばよびじや。身落の附すとと。身落の附すとと。
うまもく。身落の附すとと。身落の附すとと。身落の附すとと。

小ざりしが。枕原平次下揚（おもて）れて。かにそまど八九ト。やうすすみ
奥の庄屋（やしろや）へ入られべ。一庄の老を。ちやもと重ねは業附（むらめつき）。と。ゆくと。高
たま見き。かにそまねぬ身と。平次そよきてこれままで。ゆく
は。京の一生に。愛（こころ）ねかきひいわう大歎（おほなげ）にもびくとせぬ事うぞり
の。もはよバ。そ。やはうきまきとやうすば。ちよとか見ひとやせと。
膳よりれてなしひあ。ああれかれべかよし。おしやくも勧
の。身。そよみてやんむる。かく何事に。かくよきに。やひゆせん。ゆく
かくに。かくで。かく。篠谷といふ若が家。かくに。かせて。わざせと。
之、平次を。篠谷に。あて。市内谷と。かくに。考と。ゆくと。され
ば。廊へ坐つゆ。かく年ひとく。かく。す。あつ聲を。おー篠谷支方
あくさん。あか。奈の町。お母さま。アキアヘ。おの勤の。おうれぞ。
ら。あく。ハ。忙に。坐客（すうぎやく）。一。市の。若に。居つうと。力抜頭（ごくぬかずし）。と。居つう。

八束（やつしやく）で。いよ。が。豊。も。吹。く。四。あ。う。二。そ。で。四。今。上。ち。の。お。け。の。大。通。枕
平次。薪と。一。産。て。持。び。い。よ。の。五。重。の。只。今。ち。被。て。扇。へ。うち
ち。木。板。へ。も。け。み。や。よ。お。盆。よ。お。薬。よ。と。旅。う。よ。に。又。旅。う。お。問。舍
大。通。東。社。引。つ。と。旅。う。食。を。食。を。入。食。う。き。ち。

二 壱を盡喰（ごんき）。身に。仰。食。大。通。う。金。細。エ

奥に。ひ。あ。う。玉。室。の。ど。か。や。き。て。ま。と。酒。と。に。浮。あ。枕。原。平。次
大。敷。床。社。に。ぬ。ま。し。れ。る。あ。う。し。大。通。ぎ。ひ。ま。よ。あ。ひ。が。拳。お。摸。じ。い。か。う
そ。ま。一。四。と。下。テ。も。上。テ。も。署。の。酒。ふ。更。く。廻。う。お。大。通。一。刻。答
酒。若。童。あ。う。従。事。た。つ。それ。は。食。う。ぞ。カ。う。ら。き。る。か。く。食。う。事。を
供。ま。あ。り。こ。あ。が。て。を。食。め。う。と。か。う。れ。ん。く。來。れ。つ。う。は。公
け。一。や。あ。ぬ。ち。ま。き。小。机。極。で。先。大。通。ま。さ。し。核。の。足。筋。工。方。は。咽。

今。で。も。五。全。以。前。て。ど。よ。あ。う。と。か。う。の。山。骨。を。小。ざ。し。也。走。る。あ。壁。

奥れと修れりよすやまつあひやでござらましゆの家おう家の金
根引ぬいてとままでしがさりこれ候えんがまく年を春らぐて
身語くと見ても。ヨークがむにさのぬか。西もみうちが玉すやう
がもせいで。ひんとあくろ頭のまび寝平次坐とがめて。ゆくば見遣と
すは平次がむに様よみへやう。五ぐと敷りの席中をまわる。と古
ゆんととめう声ていゆ。おれ毒らすと麻ちまにゆひと
因全とうれゆけねは國たすてりれき五公ひ難言努へあまえと
ゆきがてすめへ平次坐ていふも先せきもももくらひそ
何者もかくぬう跡面せん審へさせ。アヒと差て勝を立出付ひ
彦登へゆうねんへ大庭のまく東郊うる木前肝づかべて老翁
今きひのまにま筋よひ五へ來へ一と五義がれ、ハキビヅ
事す。下りて石橋との合戦に参拵ひにゆくとあらあらて

時暮すとも加くまびすかく流窄仕兵もお梶原の斬鉈
安二の生既也何事もも塊多處のひりおもとを、が教給云ひて入
きと身のとく機事にとまつて、あが教さんとさひ
りてはれもあくすゑあにまく廊^{らう}よとせひ
一通うち嶋^{しま}山觀文施事へゆきめりとぞ教給のひりの
やひすに。次奉書^{まこと}わざにあじと始終^しせばれ、平次まで
むの山^{やま}をひ去^そ。父の身^みをとひりもすい物^{もの}をまの
自^じからに取^とりべ。それ終^しかにて教給^{くわく}もと織^{おり}ひ織^{おり}
ゆと。身のゆいうちに度^{たま}の鳥^{とり}も解^{わか}れば大難^{おほ}なにて重^{おも}
ゆきと。りがきて酒^{さけ}をあさり、かみ三^{さん}ま^まくぞれ
平^{ひら}なへりまうと。又盡^{つく}改^かめてどうくとも、隣^{となり}を^と親^{おや}も
所^{ところ}まへてのまゆひも別^{わかれ}んと和^わきをもすに一^{ひと}ま乃

ちのいのとア。油栗の一勝、力う勝持り。かわめてよしと云れば。
されど、お老が暮れ、中庭の影えもア。老代へ、平家の被服を送
角巒の内方に、正嘗流率の身とあじほ。テ、ままたく、
うりと着す中に、あじゆく。一室室のけ刀やもくとも、今に
渡さんも、きに、至の身も、きりべ、豪拂ひや、より先。何と云ふ
刀せぬも、あざびて、豪すゆも、をばら御法のゆう。柔が家は、
御下り。平家に、私義也。豪代の豪家と代く。と仰て、へばる。
多めの事歟。豪を改めに、御下りなふと、歸れ。豪を一勝と
名づて、平次に、清ければ。平次清れ。仰ゆをめきかけて、一同
見るも、もうと聲をひくに、轟々。まろ音響うち手を拂はれ。ひく
あや、豪がひきぬけて、とくと刀れ。冰の如き身のそり。
志れ。豪がひきぬけて、とくと刀れ。冰の如き身のそり。

小鳩丸とよき方。手が有利ひ遠ひよだ天勝希代乃室賓。
毎切膳丸みもかどくね名録。奉へう金玉を拵合ひつ。是の膳は古
不善す。手釣三へ度堂バ一簾の古塵矣あんたをてお意にゆうと。
情ゆくもに細々とすれば。いと多岐がち送す。おの難ひも
忍こむもひや鳥とよき方。忍て重てぬの種幸くれ寛解もも
忍ぬ名徳ひとぞうあてそく服き。墨翠毛筆持ひりともと。是
みあくらまひ平体してぞ居うちきる。軽々と扱ひて。墨云のは
同利の上。ふ焉とやに遠ひに去か。人の脇ひと腰をぬむ。物の
やうに後縫ひ。而ば無く。名手と争てあつと。射手に
射手とすれあがねく。とれが。而後く。安ひゆゆうせ。腰
後で。あくとひよでひて。それが。まよゆうとすく。某は是うち
すじ立脚へ。もと。城にて源氏の生れにて。アム。先あく。と

またとす。又。太刀の手をもくと。押並て。手をひき。手をひき。の
事あ。主刀系ア御て源氏のえり。度に。先あく。といひ。うね
モ。そは。ア御。そと。そか。が。今子と。ロ。度。二。百。度。何。も
是。手。は。五。度。られ。け。力。度。大。ね。され。ば。手。度。西。く。も。も。も。
う。と。の。射。と。ア。御。は。は。か。し。大。名。に。あ。と。ば。け。三。高。あ。の。手。に。
あ。高。あ。と。も。あ。高。も。車。か。さ。び。せ。ひ。を。す。き。一。代。の。歴。に。更。と。
の。う。ひ。ま。を。ぐ。の。手。に。転。手。も。手。を。す。ぎ。と。も。つ。ぎ。は。書。は。織。
高。き。う。紙。平。次。と。も。手。を。す。ぎ。一。代。の。歴。に。更。と。
の。う。ひ。ま。を。ぐ。の。手。に。転。手。も。手。を。す。ぎ。と。も。つ。ぎ。は。書。は。織。
高。き。う。紙。平。次。と。も。手。を。す。ぎ。一。代。の。歴。に。更。と。
手。を。ひ。か。う。が。被。みて。お。も。を。ほ。ふ。肩。に。お。ん。あれ。を。手。を。食。よ。と。
銅。鏡。と。つ。ひ。き。れ。ば。め。く。ね。手。を。と。お。と。

事にほむぞと。が城太庭に済。されば太庭は三百萬石計す。が
あに了金を。を此種の代わらし。もえをす。ば力がもに矣。
所惜もあく。福島。立派。おのの宿にひきて。金が附う。慶美り
珍んとす。も若く。ゆきと。酒と。うらうて。もゆうる。接せ
坐。の鷹。と力がおて。草を。立して。に。よゆ。天。も。よ。地。そ。
飛ぶ。とくに。坐。ひ。ゆみ。お。く。を。か。て。太。庭。は。名。者。の。は。
天下。の。奥。底。三百萬。で。活。か。し。立。方。巻。は。今。の。事。是。に。き。も。か。じ。れ
た。こ。ひ。う。底。三百。萬。と。い。ま。ひ。わ。も。ひ。事。で。あ。し。報。め。の。報。端。も
よ。ハ。玉。痛。い。あ。勵。あ。か。ど。あ。れ。て。報。次。も。ひ。め。に。住。ま。す。と。大
轍。た。が。そ。う。ぞ。い。い。れ。れ。活。を。と。て。い。も。も。戻。り。べ。づ。と。安。方
ゲ。す。う。そ。く。り。一。報。報。報。ま。す。よ。それ。奥。の。ろ。人。お。麻。す。も。
み。あ。く。お。ち。と。お。体。と。て。い。ゆ。う。立。ハ。三。バ。三。あ。や。づ。う。お。り。こ。へ。お。づ。

欠。び。汝。か。て。勝。手。又。ぞ。立。て。初。く。お。公。無。べ。朝。下。平。壁。そ。序。に。報。す。
因。く。ア。恰。遇。う。も。あ。び。く。は。も。そ。り。の。室。を。活。見。立。て。あ。ず。
け。金。西。て。少。ぎ。し。伏。活。か。り。と。が。の。三。百。萬。次。す。に。活。せ。ば。平。壁。
お。海。う。海。う。必。需。馬。の。忠。を。と。つ。す。伏。く。よ。懼。れ。ま。ぞ。
如。経。済。内。は。竹。ね。の。革。ア。も。モ。モ。三。百。萬。ア。も。く。と。セ。ー。カ。く。ち
ム。能。よ。き。太。庭。ア。い。あ。な。も。り。キ。モ。空。く。卑。す。お。ま。の。鳥。ハ。正。義。乃
キ。有。強。積。一。盈。倉。ア。も。空。經。ア。び。と。テ。ア。も。う。び。と。伏。び。一。強。ア。
空。レ。し。う。矛。槍。の。金。底。て。い。も。に。活。て。活。る。う。も。空。り。と。は。れ。ゆ。ん。
て。い。も。く。も。と。お。け。ひ。ら。ひ。と。言。わ。虎。が。ひ。立。て。活。見。ら。で。空。
西。キ。と。う。も。バ。づ。や。され。け。ま。お。じ。う。矛。槍。金。底。一。を。も。義。経。ア。う。
お。く。は。れ。て。ゆ。う。に。し。ま。矛。槍。も。空。も。因。ま。あ。れ。ば。活。見。ア。ヤ。く。う。も。
お。じ。う。矛。の。金。底。ア。う。れ。す。と。で。も。お。れ。ば。い。ま。も。く。空。と。活。見。ア。

久
現世後生城一荷に荷よ出家停
經浦冠老助のぬる金の廢金

三 沢世後生城一荷に有りて出家侍
源九郎を經浦冠者則れのあね延金の義金紙書んじて。
たちすら二段に勝利をひき。今見れか云ひ延金に有て。居ま
る政とすり心事ひらずをひく。はやへ軍家のめ定めても
ゆふがの事れど縁あうて。本隊の軍は政。多勢は日昇。市谷
東也。無名ら高富とひそひそば。ゆれし復古くりと。
ゆきへて。北味せよと下却。されば。軍矣。亂先にと。病の日。云
ひる。高富。無名のうそを覺にす。や。待候。や。三人かひは。身をねれど。云
ひゆ。そえしゆひに。肝はばげて。春とさと。迎ゆて。無名
追かけ。や。ゆき。ゆ。寶肩も。や。ひ。袖せき。手方。ま。袖れと云ふ。と
せ政乃うちも。れ故へ。無名ゆく。と。声吹。それ。無名。た
つ。和氣へ。無名。と。ゆき。對面。切ら。奉と。ま。じ。あ

市内若の命事に於ては、總若に先達れ。腹立の意を起しては、は
されども、總若に勇を以て居らる。せば、控て今は、傍そには。
後も、參り易れども、されば、心も、体もと、頭も、じきも、難く。
財政と、直義の血骨を、やされざる。凡、道世の才、豈、後しとつ。
战场に、身を、發せして、登らざる。例次、すなむ。才、處の、を、廢へ。
はは、政も、ひがく、く、差、は、と、うられ。總若すて。や、取、き、ア、敵、を
そそぐに、あつて。け、總若も、難い、も、と、うられ。總若すて。や、取、き、ア、敵、を
も、う。敵、盛、の、總若の、才、尊さう。されば、敵、て、ありと、血、ま、う。う
然、と。せきに、せりて。と、うされば。總若、確、べ。ま、處も、難、ま、う。難、を。
今、は、事、へ、されば。總若の、血、骨の、何、き、と、せろ。相、對、すに、
仰、る。敵、と、か、見、し。う。か、く、と、敵、の、總若の、心、お、は、ま、れ。

幕、は、え、れ。先、こ、と、と、高、に、は、ひ、と、されば、内、縫、ね、ひ、重、慶、の
と、あ、れ、る。と、の、に、も、被、是、互、不、波、あ、れ、た。行、す、法、も、よ、ば、り、に。
總、若、を、廢、す、收、び、これ、から、と、速、に、あ、り。總、若、す、て、ま、う、互、を、
み、と、の、れ、約、の、血、骨、い、成、る、細、そ、り、や。財、政、差、そ、れ、ば、平、安、
市、の、若、主、て、平、家、の、云、ま。主、の、重、敷、雲、代、付、て。毛、陽、さ、う、
亞、に、登、り、て。元、蟹、代、さ、う、連、寛、せ、す、れ。ふ、る。られ、も、よ、宴、に
と、よ、五、平、との、多、く、の、後、と、か、ま。總、若、平、家、志、代、す、す。
不、意、に、あ、つ、堅、じ、出、合、事、の、軍、部、の、又、ろ、か、と、ゆ、う。せ、ん、す、く、そ、を
詔、の、平、既、す、へ、ば、ら、し、て、朝、餐、と、せ、う、に、清、せ、め、と、ゆ、く。
難、ひ、と、く、は、廣、濟、も、あ、と、尾、ひ、れ、故、付、て、や、よ、る、ゆ、う。朝、餐、と、く。
ゆ、數、ひ、か、り。系、に、ゆ、き、れ、き、多、の、至、石、移、う、う。と。總、若、
お、う、う、づ、き、ひ、ふ、も、ま、思、考、の、此、數、ひ、也。平、との、ま、う、鑑、み、く。



頃が小説に配流の附。文豪と人を筆ひのんへおはせて、必ずや代序を極
りよれりう去みづ。生のぬまゆくも、ざうあも色面より。
人の心が銷きずべく、好まひたるの物をもげ一車ば持とす。
文豪力吸みて、二を源氏本興の玉城四、さんと御こしすより
きり。教習收びて、八極大内林の筋者とと氣付にすと
あとつあひ人の心持かひ。そひは、往古へ詰をもどさと
寝あくに勝じば。今れども、ぞきひひ伏也、も詫事の如く
あきらて、羣木にりぬをそつても。さて、うき集めのにて、麗
花うねのめとわをこそも、うもよど。事にうむし別度て、がくうよ
がくじと計りてのちう。方々を、蟲も、竹葉、虫、竹物、う
るすす。至れり、東庵に事ひ、ままで、うき事に、ひ文豪アの
ひさめ跡み文林とが草へて、筑地のまとうとくづき。

内政代昂ひもと。まろの代より一晩の間紙を拂つて財政局
に金が附致つきのあひもと。紙は勘定紙にてかゝれり。
美鈴の手に類ひあく。まほの紙にちとすてを拂う。財政を
作天主。室へこれぞ原家の主計う去る。敷葉の所を
へいじて海うきうどとの事。鶴巣壁てを底もほが候ふ。て
斗破破ひて海うきうとへきと。襷もまと縫ぬて宿の下處を
うちさくと切破り。ゆつとぬらるる者。何者かぞと云ふ。或く
あに詰ま。奉ハ彌田政清が事。彌田の次子。政清が事。彌田の平次
や若浦は名の如くに拂う。源氏のあだ。敷りうてござりてえま
はう。毛の箇城あひ難く。二度源氏へ立ぬうとを語れを正解
り。御りられは慈父の父の想ひ深く。正解擧げねにゆくと
のうひ。總に市の若毛と無名に付き。素の討死の虚實にれ。

おもにそひ妻てちきの歎愁苦と聲てかよめまやんと。四者ば
うそひの妻にぬび込むと方子に鶴巣令の本名敷りうての夫
拂う。おづけ。神も付くぬわう。惟今のお詫承て拂へ拂を拂
やかと始終孤夢く拂う。熟達山世にす。ゆきが。に黄泉の
宿拂はり。又にきてはまた拂う。拂うやうんと。すゑく後脱也
ぬき。脱うき切て死ううき。これにちくて彌田が血脈の後にけると。
財政も無名も。神みが也絆に神見敷ひ拂て。山へ山へねむ。拂う
や上げは角も上流に拂。主の下拂拂。よ鶴巣。拂う
こそゆくれるも。敷葉のうきあひかるすと。あくは拂う
きひ。一ヶ。け分拂て。缺とあくで拂う。も寛の因縁をす
るが。ほて。主の菩提。門の正義城。拂ひ。主の正義城法を元と
改て鶴巣。拂う。拂う。主の尾が本局もたれ制廢しき。

よもや日録	書林	大森えもん	一 わ落
都鳥妻恋箋	五冊	西漢太平記	五冊
女非人経錦	五冊	暖太平記	五冊
今川一猿記	五冊	暖太平記	前編
肺仰る我	五冊	摘軍法鑑	後編
風流東鑑	五冊	摘軍法鑑	後編
扶國歌姉岐	五冊	百合雅錦	嶋
風流宇治東政	五冊	百合雅錦	嶋
當世信ち記	五冊	肺仰平夜	前編
薄雪音羽游	五冊	肺仰平夜	後編
		風流扇軍	五冊
		風流川中鳴	五冊
		敦盛涼平桃	五冊
		移改現左鶴	五冊
		道凌寺吹柳	五冊

かく火宅の門が出来たるをも。無事に通る。教りうれし
 事は伴の喜樂の爲にえとておひきとの繫馬若とおに前場
 改建せんと用意するも。種金よりは出資が難り奉
 まぞハ勿れど。もとをいはば尾と肩の尾が女房かへ先く
 おへとうりの事の際の事。財政の事よりは約束の追跡すと。
 す先と氣をきくによう。又もかのぐくふぶくとおの方へを
 うちもひぬ。おひままでおれづきのほのう。假想の遠
 似て金は先ひ承知するも。勧めむげに。福田が新宿もあ
 客にて。総務ある。財政といひひかづ。新刊の出版に。おどろ
 おきとよ。更にそれとくふ金をあら。

はえ巻終

兩面常盤塗ふ冊	折や人た誕生記ふ冊	聖口寫の的ふ冊
風流庭訓往来ふ冊	御前義經記八冊	因義惠教ふ冊
利信疏軍記ふ冊	古今寶物語四冊	因もか一擇ふ冊
捕戻艶軍謬ふ冊	古今初音大鑑ふ冊	古今初音大鑑ふ冊
老子形氣五冊	織田志記拾冊	古今初音大鑑ふ冊
筆道指南大成	神國芦弓艸也根大書 加三冊	古今初音大鑑ふ冊
宋時古文	万世般事枕傳文書三冊	古今初音大鑑ふ冊
等法奥義抄	世室傳受袋 本のやうやう三冊	古今初音大鑑ふ冊
前論大全	孫休さんけ袋 本のやうやう二冊	古今初音大鑑ふ冊
婦人療治全相應	新砂石集 本のやうやう五冊	古今初音大鑑ふ冊

